研究ノート

性的マイノリティの生きづらさの意味

― カミングアウトから捉える支援のあり方 ―

山　田　克　宏

職業教育研究開発センター客員研究員
秋田看護福祉大学看護福祉学部

Meaning of difficulty in living sexual minorities How to provide support before and after coming out

Yamada Katsuhiro

Vocational education center of research and development
Akita University of Nursing and Welfare

Abstract：Coming out is meant to express a discomfort with one's assigned gender at birth and that one is not heterosexual.

However, as is clear based on the suicide caused by the announcement to Hitotsubashi University Law School students in 2015, it can comprise a negative aspect in that one can become an object to be alienated and excluded in the from of social bullying and prejudice. It can be said that this negative aspect has the potential to increase.

Therefore, by organizing previous studies, we will clarify how the difficulty of living as an individual belonging to a sexual minority for sexual changes with and without coming out.

In the case, we were able to identify the meaning of life starting from suffering from one's sexual orientation and gender identity among sexual minorities.

In the future, I aspire to deepen my research on the institutional aspect of a society that embraces diversity, support methods before and after coming out, and support systems.

Key Words：Difficult to live, Coming out, Homosexual disgust, Visualization, Gender role division of labor

抄録：カミングアウトとは、異性愛者でないことや生まれて時に与えられた性別への違和感を表明することとされている。しかし、2015（平成27）年一橋大学法科大学院生へのアウンティングによる自殺でも明らかなように肯定的側面より、社会的ないじめや偏見という形で疎外、排除される対象として否定的な側面が増大する可能性を孕んでいるものと言える。そのため、先行研究を整理することで、性的マイノリティの個人としての生きづらさは、カミングアウトすること、しないことでどのように変化するのか明らかにする。

事例では、性的マイノリティの性的指向や性自認で苦しんだことを起点として「生きる意味」を見出すことができた。今後は、多様性を包摂する社会の在り方を制度面、カミングアウト前後の支援方法、支援体制について研究を深めたい。

キーワード：生きづらさ、カミングアウト、同性愛嫌悪、可視化、性別役割分業

1．緒言

近年、私たちは、カミングアウト、同性婚、LGBTという言葉を聞くようになってきた。

カミングアウトとは「クローゼットから出てくる」を意味する英語表現の（河口 2002)、異性愛者ではないことや、生まれた時に与えられた性別への違和感（性別違和）を他者に伝える行為を指す（三部＝2019：155）としている。つまり、性的マイノリティは、性自認・性指向の違和を抱えることを通じ、それが動機付けとなりカミングアウトをおこなうことが推察出来る。また、レズビアン・ゲイの解放運動では、同性愛を不可視化する異性愛規範社会へ抵抗をするために、「同性愛としてカミングアウトする」アイデンティティ・ポリティクスの戦略が展開されてきた（三部＝2019：155）としている。

「LGBT」は、Lesbian、Gay、Bisexual、Transgenderそれぞれの頭文字をとったもので、セクシュアルマイノリティの総称ともされる。このことから、異性愛者でないことを他者に表明することを指すものと言えるが、マジョリティからすればいないはずの人が居るという状態に向き合うということが生じる。つまり、2015（平成27）年の一橋大学法科大学院生のアウンティングによる自殺でも明らかのようにカミングアウトは、肯定的な側面より社会的ないじめや偏見という形で疎外、排除される対象として否定的な側面が増大する可能性を孕んでいるものと言える。そのため、先行研究を整理することで性的マイノリティの個人として生きづらさは、カミングアウトをすること、しないことでどのように変化するのかを明らかにしたい。また、性的マイノリティや家族がカミングアウトをどのように捉えているのか、さらに、性的マイノリティの私記からカミングアウトを行う困難性を考察する。

2．研究方法

本研究は、文献研究であり、法令、議会質問本文などの資料を踏まえ、先行研究などの見解を検討し考察している。

操作的定義

性的マイノリティは、基本的にはLGBTQと呼称されているLesbian、Gay、Bisexual、Transgende、Queerとした。ここで言うQueer（クィア）とは、アセクシャル（Asexual）性愛感情を持たない人を含む包括的な人びとを含む概念とした。

性別違和（トランスジェンダーの１つである）は、生物学には性別が明らかであるにもかかわらず、心理的にはそれとは別の性別（以下「他の性別」という)。であるとの持続的な確信を持ち、かつ、自己を身体的及び社会的に他の性別に適合させようとする意思を有する者であって、そのことについてその診断を的確に行うために必要な知識及び経験を有する二人以上の医師の一般に認められている医学的知見に基づき行う診断が一致しているものとした。［性同一性障害の性別の取扱いの特例に関する法律第２条］

3．結果

3-1．カミングアウト

私たちは、カミングアウトの社会的な意味を自己受容という形で捉えることがある。大坪による先行研究では、解放主義という言説と抵抗言説という２つの政治的行為の側面が存在する（2013：79）としている。その点を踏まえた上で、まずは、カミングアウトしやすい人、カミングアウトしづらい人、やむを得ずカミングアウトする人、カミングアウトしない人の４区分の特長を述べ、その後にカミングアウトの社会的意味について再考したい。

(1) カミングアウトしやすい人

日本では、著名人や社会的地位が安定している専門職、つまりは、芸能人、弁護士、デザイナー、知識人、クリエイター等がカミングアウトしていることが散見される。また、桐原・坂西らのいうように家族が性的マイノリティに対して否定的な感情が少ない場合は、カミングアウトしやすい（2003：56）といえる。その意味は、性別役割分業に関して否定的な考えを持つリベラル層に属する人々であれば、さらに、カミングアウトの否定的感情は、少ないことが推察できる。

(2) カミングアウトしづらい人

カミングアウトは、異性愛者の鎧を外す行為と言える。以前、職場等では、マジョリティから「まだ、結婚しないのか」「彼氏はいるのか」「彼女はいるのか」と問いかけられる場面が数多くみられていた。

このようなマジョリティの振る舞いは、異性愛が一般的または、あるいは「あたりまえ」という文脈で発せられたものである。同性愛者は、異性愛を前提にした社会のなかで、社会的に同性愛嫌悪のなかで生きているとも言えるわけで、「カミングアウト」により解放、抵抗という肯定的な意味よりも他者や社会から阻害、排除されるリスクが大きいと考えるのは当然である。つまり、性的マイノリティは、クローゼットのなかに居るようなカミングアウトしづらい状況であることが示唆される。また、田中・今城は、「親が保守的で、著しく否定的な反応を示したり、言葉で罵倒してきたりするために、当事者は自分のセクシュアリティを打ち明けたがらない」としているように、家族内であってもカミングアウトしづらい状況が存在することが推察される。また、特に同性愛者は、自分自身の性指向に対して、自己嫌悪感情が生じる可能性（2021：60）も示している。その意味で自己嫌悪感情が強い傾向にある性的マイノリティは、日々、自己の存在が揺らいでいる状態であると言えるわけで、自己肯定感が低くなる可能性を抱えていると言える。また、自己の性指向や性自認の不協和から自己受容が出来ていないため、カミングアウトしづらい傾向が生じていることが示唆される。

(3) やむを得ずカミングアウトとする人

丸井が「インタビュー調査から性同一性障害の子供たちは、家庭や学校の生活の中で、性的な成長とともに現れる男女の身体的な特徴や言葉づかいから自分のセクシュアリティを隠していることが難しい状況に追い込まれカミングアウトしている（2020：151)」としているように、性自認と戸籍上の性別が不協和状態になることが示唆される。トランスジェンダーの日常生活を生きづらくさせているのは、他者認識可能になるという可視化がされやすい点にあることが推察される。そういう意味では、トランスジェンダーは、医療、福祉、教員、行政等からのサポートを受けやすいわけだが、当事者にとってそのような配慮を受けることが本意であるかは疑問が残る。その意味は、トランスジェンダーの「自分の性自認や性指向を知られたくないという意味での「ほっておかれたい」という思いは、阻害されるということである。言い換えると、マジョリティは、性的マイノリティの心に土足で踏み入る状況が生じていることが示唆される。このようなマジョリティの振る舞いは、性的マイノリティが「自分の周囲にはいない」ということを要因として生じていることが推察される。

(4) カミングアウトしない人

一橋大学院生のアウンティングの事例は、カミングアウトすることが肯定的な側面でなく、否定的な側面が大きいことを示している。つまり、カミングアウトしないことが自己の存在を守るための予防措置であるということである。

3-2. 性的マイノリティに対する社会の受け止め方の変化

文部科学省は、2015（平成27）年に「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」（通知）において、全国の小中学校及び高等学校に対して性的少数者への対応を求めている。しかし、文部省が2017（平成29）年２月24日に公表した小中学校の学習指導要領の改定案では、小学３、４年生の体育の教科で「思春期になると異性への関心が芽生える」とも記載している。加えて、中学の保健体育では「身体の機能の成熟とともに異性への関心が高まったりする」と書かれている。この２つの文書からは、異性愛者以外は、存在しないことが前提となって教育がなされている実態がうかがえる。

それに対して、西村智奈美によれば「文部科学省は、学習指導要領の案の段階で審議のまとめに対するパブリックコメントを2016（平成28）年９月に募集したが、全体で2,974件寄せられたパブリックコメントのうち、LGBT などの多様な性を教えるべきだとするコメントは368件（12.0％）あったとされ、こうした意見は学習指導要領案には反映されなかった」としている。そして、「多様な性に求めてきたLGBT の当事者たちは、『LGBT などの子どもたちが教室にいるという実情を反映した内容にしてほしい』と訴えているが、文部科学省は『保護者や国民の理解などを考慮すると難しい（朝日新聞３月31日朝刊記事)』として、反映されなかった理由が報道されている」としている。そのため、マジョリティは、性的マイノリティが社会的に存在していることを否

定的とらえていることが推察される。前述のマジョリティの考えについて、桐原・坂西がいうように「伝統的性別役割意識の強い人は（傍点は、筆者）、弱い人に比べセクシャル・マイノリティに否定的な印象をもち、否定的な態度をもつと推測されるとした。また、強いジェンダー意識が、伝統的で固定的な性役割にあてはまらない性的マイノリティを特別視させる」（2003：56）としているように、性別役割分業に関してもマジョリティの価値観が社会に影響与えている。このことは、性的マイノリティの立ち振る舞いは、生きる上での「男らしさ」「女らしさ」という価値体系から外れることである。性的マイノリティは、逆説的にマジョリティの家族観や性別役割分業の保持を助長する存在となり得ると言える。また、性的マイノリティの存在は、マジョリティからすれば自分たちが重視する価値観を否定せざるを得ない方向に向かってしまう危険がある。つまり、「いないこと」として対応し否定することが、マジョリティの価値観の維持に必要なことといえよう。

3-3. 性的マイノリティの私記からの考察

本節では、LGBTER（エルジービーター）の私記からカミングアウトに関係する部分を抜き出し、カミングアウトする側、カミングアウトされた側、カミングアウトに関する組織、社会の受け止め方、困難性、容易さに関して考察をおこなう。

3-3-1. 麻未の性自認への違和感（トランスジェンダー）

麻未は、母に*「胸のふくらみを隠したいからナベシャツを買う（2018:15）」*と告げた。ナベシャツとは、胸を平らにすることを目的とした体形補正用の下着を指すわけで、このことは、麻未が女性という性自認ではなく男性という性自認であったことがうかがえる。

１）医師の判断

医師は、診察のなかで母親の*「それでも男なんですか？（2018:17）」*という問いに、*「イスに座る時、お母さんは足を閉じるけど、麻未さんは当たり前のように開いてますよね。足を組むとき、お母さんは膝の上に膝を重ねるように組むけれど、麻未さんは膝にくるぶしを乗せるように組むんです。この子は脳が男の子なんですよ（2018:17）」*と説明している。この医師の説明は、カミングアウトを受けた母親が、現実を受容することに繋がった出来事であったことが推察できる。

２）麻未の行動、母親の受け止め方

*麻未は専門学校に通いながら、ホルモン治療を始めた。だんだん声が低くなり、ホルモンの影響でニキビも増え、男性に近づいて。「変わる姿を見るのは複雑で、『よかったね』と言ってあげられなかったかな（2018:21）」*と述ており、子どもが性同一性障害であるという現実には、向き合うことに困難性が大きいことが示唆される。ただし、*「性別適合手術の段階では、『痛いだろうな』『万が一、命を落としたら』とか身体の心配はあったものの、最後には、「行っておいで（2018:21）」*というように段階的に娘から息子への変化を受け止めていたことが示唆される。ある意味では、トランスジェンダーは、可視化できる変化が生じるなかで他者が受容出来る時間を持てるといことであろう。

３）職場の理解

*「麻未の職場の社長は、あらかじめ事情を知っていたため応援してくれて、手術のためタイへ向かった（2018:46）」*としているように麻未が理学療法士という専門職であったこと、医療関係職ということから周囲の理解が得られやすい環境にあった。そのため、所属や承認の欲求が担保される環境を相互に作っていたことが大きいと言える。

４）社会とのかかわり

現在麻未は、*「NPO法人代表として、誰もが安心して医療を利用できるように、学校や病院、企業で講演会を行ったり、性同一性障害の子どもをもつ親や医療従事者向けの勉強会を開催している（2018:47）」*と述べている。このような取り組みは、社会に対する働きかけであり、性的マイノリティへの理解が醸成されることで、抑圧から解放へ向かうことになろう。ただし、気を付けるべきことは、このような行動が肯定的側面と他者認識可能になるという可視化のために、スティグマを持たれるという否定的な側面の両義性を孕んでいる点である。その意味では、性的マイノリティ、その家族、そのパートナーや友人がこの両義性を引き受けていけることが必要ということになろう。

3-3-2．大方なつみ（レズビアン）：中学時代

*「最初は、彼氏が出来たのだが、身体を求められることもあったし、自分も性的な興味が芽生え始めた時期であったが、その一戦を越えてはいけないと思っていた（2018:94）」*とし*「彼のことは好きでしたが、好きの種類が彼と私では違うなと感じていました。ドキドキするというより単なる安心感で。それに本当に愛すべき人は、この人じゃないとも思っていました（2018:95）」*というように性指向に関しての葛藤があったことがうかがえる。

パートナー、土屋朝美

1）カミングアウト

親に友達として紹介していた女性との関係が*「パートナーであり、レズビアンであることや結婚の話しをした（2018:112）」*というように時期を見計らってカミングアウトしている。それに対して、父親は*「おまえもいろいろ悩んでいたんだな。これからふたりでがんばれよ。今の日本ではまだ難しいけれど、いずれは同性婚が認められる時がくるはずだから大丈夫だ。同性婚が認められたら、俺が正式な結婚式を挙げてやるからな（2018:112）」*とまで言ってくれたとしている。父親の理解ある態度は、親子関係が良好な点、母親の最期を妹、父親、土屋で支えたことで絆が深まり、お互いのことを理解していこうとする態度が育まれたことが大きいことが示唆される。

2）将来について

*「私とパートナーで、一人ずつ生むことができたらいいですね」というように精子バンクが婚姻しているカップルにしか提供されない」*とうように、現状の社会では、性的マイノリティが妊娠、出産するのは難しいと言える。また、彼女らは、カミングアウトの先に同性婚ということを意識していることが推察される。

3-3-3．村上裕の苦しみ（ゲイ）

*「大学に入ったころ精神障害の症状が現れたとしている。そして、大学に行こうとしてドアノブに手をかけるが、全身が硬直して動けない状態であったとのことである。そのことについて『きっと、本当は行きたくなのに、行かなければと感情を押しつぶしていたから、心と身体が分裂して、過度の緊張が起こったんだと思います』としている。そのため、数人のカウンセラーに救いを求めたが、性的マイノリティに理解のあるカウンセラーが見つからず、そのうち、カウンセリングも病院も行かなくなった」*としている。このことから、村上が性指向や性自認に悩むなかで、社会のなかで生きていく困難さを抱えていったことがうかがえる。

カミングアウトとその後の母親とのやりとり

*村上は、「高校生の時にカミングアウトしたとしている。その時、母親は差別と偏見と悪意に満ち、攻撃的になったとしている。そして、母親は『いつか子どもさえできたら、ゲイでも許す』と言ったとしている。また、『仕事さえしてくれたら』『ひとりじゃないなら、それでいい』に変わり、『幸せなら、それでいいわ』」と変化していったとしている。*このような母親の気持ちの変化は、村上が自分の問題意識から心理学を学び始め心理カウンセラーとなりカウンセリングルームで当事者を含む人々の支援をするなかで、自己肯定感が高まったことも影響していることが推察できる。また、母親の気持ちは、パートナーが出来ることで現実を直視し、同性愛嫌悪が軽減されていったことが大きいと言えよう。

4．考察

1．性的マイノリティから捉えるカミングアウトの位置づけ

麻未は、女性になっていく身体の変化によって、女性ではなく男性であると性自認をすることで、ナベシャツを購入しようとしたわけで、間接的な表現によるカミングアウトをおこなっていたものと言える。ただし、このことは、母親に少しずつ理解していって欲しいというメッセージであったのではないだろうか。

次に、大方は、中学時代の彼氏との恋愛を通して*「ドキドキするというより単なる安心感で。それに本当に愛すべき人は、この人じゃないとも思っていました」*という発言からは、性指向が男性でなく、女性ではないかという心の揺らぎが生じていたことが伺える。そういう意味では、性的マイノリティが性自認や性指向に違和感が生じ、その葛藤からどのように行動するのかという結果が、カミングアウトという形に繋がるケースもあることが推察される。

３人目の村上は、大学時代に性指向または性自認に関することで葛藤していたものと言える。そして、*「本当は行きたくなかった」*と述べているように、学校生活における友達関係等に課題を抱えていたことが示唆される。

２．家族から捉えるカミングアウトの位置づけ

鈴木の母親は、当初娘の性自認が女性でなく、男性であることが医師への*「それでも男なんですか？」*という問いからも受容出来ていなかったことがうかがえる。しかし、ホルモン注射をおこなったことにより、身体の変化が生じたことが大きい。そして、カミングアウトにより鈴木が進学先、就職先の理解を得たことは、母親の気持ちの変化に影響を与えたと言える。

大方のパートナー土屋の父親は、娘から*「レズビアンであること、結婚したい」*という話に対して*「おまえもいろいろ悩んでいたんだな」*という言葉をかけ、気持ちを受け止めている。このような父親の態度には、母親の最期を父・土屋朝美・妹の３人で支えたことが大きいと言える。母親とのかかわりのなかで、母親も家族も「生きる意味」を問われたからと言える。つまり、父親は、「生きる」ことの根源的な意味を問われることで、ありのままの娘を引き受けることが可能になったと言える。そういう意味では、カミングアウトは、家族の価値観、人間性が問われることになる。３人目の村上は、高校の時に母親にカミングアウトしたわけだが、差別と偏見と悪意に満ち、攻撃的なったとしている。当初、母親は、マジョリティが保持する家族観、ジェンダー意識、性別役割が影響し、攻撃的になったものと言える。

しかし、村上が専門学校で心理学を学ぶなかで、村上自身もセルフケアが向上したことが推察できる。その上で、心理カウンセラーの仕事に就き、パートナーが出来る。母親は、村上のこのような変化のなかで、*「『いつか子どもができたら、ゲイでも許す』『仕事さえしてくれたら』『ひとりじゃないから、それでいい』*に変わり、最終的に*『幸せなら、それでいいわ』」*というような気持ちに変化が生じたわけだ。性的マイノリティのカミングアウトにおいては、キュブラー・ロスの否認、怒り、取り引き、抑うつ、受容の５つの死の受容過程に近いプロセスがあることが示唆される。つまり、性的マイノリティの家族の支援では、アセスメント、心理的支援を同時に行いながら性的マイノリティで家族を受容できるような側面的支援を行うことの必要性が推察できる。

３．社会生活する上でのカミングアウトの意味

鈴木は、医療関係職ということから職場の理解を得て、専門性に基づき、経済的基盤を確立し、所属や承認の欲求を満たすことが可能になったと言える。また、NPO 法人代表として、性的マイノリティの啓発活動に取り組んでいることは、カミングアウトにより抑圧から解放され、抵抗ではなく、性的マイノリティの存在を示そうとしている。

しかし、現在の社会生活では、性的マイノリティとして可視化され、スティグマを持たれるリスクを引き受ける必要がある。なぜなら、性的マイノリティの主体性は、リスクを包含しなければ担保できないものである。

大方、土屋は、*「私とパートナーで、一人ずつ生むことができたらいいですね」*と語っており、子どもを欲しいという気持ちや同性婚の願望がある。そういう意味では、自分たちが社会に存在し、ひいては承認されていく必要性が推察される。３人目の村上は、自分が性的指向や性自認で苦しんだことを起点とし、学問への興味分野が生まれ、職業を選択し、資格を取得後に性的マイノリティや性的マイノリティの家族のサポートを行っている。

５．結論

性的マイノリティの生きづらさについて、カミングアウトしづらい人、カミングアウトしない人は、カミングしやすい人、カミングアウトするように圧力を受ける人に比して生きづらさは感じやすいと言える。また、性的マイノリティがカミングアウトをどのように捉えているのかは、性的マイノリティの性指向または性自認の受容の程度により肯定的な側面と否定的な側面の程度に差が生じる。さらに、家族は、家族観、ジェンダー意識、同性愛嫌悪の程度により、受けとめ方に違いが生じる。さらに、社会生活する上でのカミングアウトの意味は、性的マイノリティというスティグマを持たれる否定的側面を引き受けることは、主体性を担保することに繋がる

と言える。さらに、事例では、性的マイノリティの性的指向や性自認で苦しんだことを起点として「生きる意味」を見出すことが出来たと言える。今後は、インタビュー調査を実施し、カミングアウトによる他者認識可能となる可視化によって、マジョリティから排除、阻害される実態を明らかにし、多様性を包摂する社会の在り方を制度面、カミングアウト前後の支援方法、支援体制について研究を深めたい。

文献

大坪真利子（2013）「言わなかったことをめぐってーカミングアウト＜以前＞についての語り」『ソシオロジカル・ペーパーズ』22、75-82。

綾部六郎・池田弘乃（2019）『クィアと法 ― 性規範の解放 / 解放のために』日本評論社。

丸井淑美（2020）「性的少数者の学校生活の実態と学校教育の課題に対する研究 ― 女性同性愛、男性同性愛、性同一性障害（性別違和）の当事者インタビュー調査より ― 」『日本健康相談活動学会誌』15（２）

桐原奈津・坂西友秀（2003）「セクシャル・マイノリティに対するセクシャル・マジョリティの態度とカミングアウトへの反応」『埼玉大学紀要　教育学部』52（１）、55-80。

厚生労働省「性同一性障害者の性別の取り扱いの特例に関する法律第３条第２項に規定する医師の診断書について」https://www.mhlw.go.jp/general/seido/syakai/sei32/（2021. 7. 15アクセス）

LGBTER（2018）『LGBT と家族のコトバ』双葉社。

田中みどり・今城周造（2021）「性的マイノリティの自己変容とカミングアウトの関連性の検討」『昭和女子大学生活心理研究所紀要』23、59-74。

受付日：2022年３月17日